

平成29年度 人文科学研究所総合研究 研究報告

「ジャンルの記憶」とその転換をめぐる研究

—東アジアの言語・文化・表現史を中心に—

研究代表者：紅野 謙介 (国文学科)

研究分担者：大川 謙作 (中国語中国文学科)

神谷まり子 (中国語中国文学科)

久米 依子 (国文学科)

高 榮蘭 (国文学科)

武内 佳代 (国文学科)

山口 守 (中国語中国文学科)

本共同研究の概要および目的は、以下の通りである。

文学や映画などには、創作そのものが商品として流通する文化産業の側面がある。遅れて近代化を強いられた東アジアの地域において、アートとしての文学を商品として消費する読者の急速な拡大は、マスメディアの後押しを受けながら、読者の需要に応える読み物を次々に生産するようになった。生産と消費のサイクルを滑らかに回転させていくためには、類似した素材、シチュエーション、定型化された「筋」や文体が必要になる。アートがエンターテイメントになる環境が用意され、そこに文学や演劇、映画などの「大ジャンル」のもとに「サブジャンル」が生まれた。こうした「ジャンル」は東アジアにおいて急激に増殖し、大量生産と消費をもたらした。読者との関係の深い「ジャンル」だからこそ、そこに歴史的社会的な体験がたたま込まれているし、その機制に抗おうとする作家たちの身ぶりもまた強く表れてくる。「ジャンル」の地域的な横断や越境、記憶の継承と対立・葛藤のプロセスを探ることによって、それぞれの地域や社会、政治形態の差異と連続性を明らかにする。

こうした目的のもとで研究を開始し、5回の研究会、ならびに1回の国際ワークショップを開いた。

- (1) 5月20日：成瀬巳喜男監督「上海の月」の鑑賞と討議（国立近代美術館フィルムセンター）、参加者は学外ふくめ8名。
- (2) 7月25日：「歴史／物語」を歴史化する」、古川隆久（本学史学科）と成田龍一（日本女子大）による研究発表と討議。学外ふくめ、30人以上の参加者があった。
- (3) 10月5日：神谷まり子「民国初期社会小説『新歇浦潮』における自動車の描写につ

いて」の研究発表と討議。

- (4) 11月9日：久米依子「ファイチンさんと三つのハルピン—植民地のリプレゼンテーション 佐多稲子・上田としこ・村上もとか一」の研究発表と討議。
- (5) 12月1日：台湾の国立政治大学台湾文学研究所においてワークショップ「「ジャンルの記憶」とその転換をめぐる研究」を開催。1日かけて山口守，呉佩珍（政治大学），金井景子（早稲田大学），大川謙作，高榮蘭，紀大偉（政治大学），崔末順（政治大学）らによる研究発表と討議を行い，翌日にかけて台湾市内や二二八記念館などを視察した。
- (6) 1月18日：西村正男（関西学院大学）「戦後日本の流行歌シーンにおける中国趣味の継承—山口淑子・胡美芳から」の研究発表と討議。

こうした東アジアの言語・文化・表現史をめぐる研究会をへて，それぞれに研究成果をまとめることとなった。広い間口と奥行きをもつテーマでもあるので，無謀な総括はせず，個々の省察を以下に並記していくこととした。

チュシュル・テンバ・ツェリン説話とチベット神霊論

大川謙作

はじめに

チベットの都ラサから西南に六十キロほど行ったところにチュシュルという地方がある。ラサ溪谷を流れるキチュ川と，西チベットを水源とするヤルツァンポ川（ブラマプトラ川）の交差する地点にある水郷であり，チベットには珍しく魚食を行うことでも知られる交通の要所である。このチュシュル地方には，チュシュル・テンバ・ツェリンという強力な土地神がおり，その土地神の伝説はチュシュル地方を超えて広くチベットで流通していた。本稿では，このテンバ・ツェリン説話の複数のバージョンを紹介し，そこからチベットの神霊観および死生観に関するごく初歩的な考察を行うことを目指すものである。

説話の諸バージョン

本稿では以下の四つのバージョンを比較検討する。四つを簡単に列挙すると以下の通りである。

説話A：星実千代によって採話されたもの。

説話B：廖東凡によって採話された二つのストーリーのうちの一つ。

説話C：廖東凡によって採話された二つのストーリーのうちのもう一つ。

説話D：筆者（大川）によって採話されたもの。

それぞれの背景について簡単に説明しておこう。まず説話Aだが，日本のチベット言語学者として知られる星実千代によって採話されたもので，インフォーマントとなったのは，チベットの学僧テンバ・ゲンツェンとトゥプテン・サムジォルである。両氏は新中国がチベッ

トを「解放」する以前の、所謂「チベット旧社会」を生きた学僧であり、チベット動乱によってインドに亡命し、その後日本のチベット仏教研究の発展のために東洋文庫に招聘された。星実千代はチベット口語とフォークロア研究のために両氏、とりわけテンバ・ゲンツェンより集中的な聞き書きを行い、東洋文庫より *Texts of Tibetan Folktales* という六巻におよぶ民話集を編集・出版している。この第三巻がチベットの怨霊話を扱っており、チュシュル・テンバ・ツェリン説話もここに収められている (Hoshi 1983)。次に説話BとCだがチベット「解放」後の一九六〇年代から実に二十四年にも亘ってラサにジャーナリストとして滞在し、チベットの風俗習慣について多くの著作のある、漢人の中では代表的なチベット民俗学者として知られる廖東凡によって採話されたものである (廖 1998)。最後に説話Dだが、二〇〇五年のチベット滞在時にチュシュルの一村落において筆者が採話したものである。

次にそれぞれの内容の紹介に移ろう。

- ・説話A：テンバ・ツェリンはもともと意気軒昂とした若者であり、在地の神（ラ）にも不敬な態度をとったためにその不興を買い、神の呪いによって命を落とすものの、怨霊（ドンデ）となって神に復讐し、ついにはサムイェーに赴いて護法神ツィマラを追放するに至る。しかし結局は有徳のラマの説得によって仏法に仕える護法神の一員として神（ラ）となり、以後は崇りをなすことなくサムイェー僧院の外に祀られることになった。
- ・説話B：十八世紀、チュシュルにテンバ・ツェリンという熱血漢がおり、ラサのチベット政府が村に課す重税に耐えかね、友人たちとともに反乱を起こした。チュシュルに派遣された政府軍に何度となく打撃を与えたテンバ・ツェリンだが、チベット政府の奸計にはまって捕殺され、その屍体から剥がれた皮は当時の摂政であったデモ・ホトクトのテンゲーリン僧院の堂内に吊るされた。だがテンバ・ツェリンの靈魂は死なず、復讐の鬼となってチュシュルとラサを彷徨い、崇りをなした。そこで高僧が加持祈祷を行い、彼をチュシュルの地方神として祭り、地域一帯の民衆の生死を司る神として神像と廟堂を建てて安んじることにした。
- ・説話C：チュシュルに住むテンバ・ツェリンは、サムイェー僧院の赤面の護法神ツィマラ（ツィウ・マルポ）を信奉する信心深い鍛冶屋であったという。だが詳細は不明ながら、ツィマラに不正な振る舞いがあったと認識したテンバ・ツェリンはツィマラに失望し、怒りのあまり火床で自らを焼くという凄絶な方法で自殺することによって鬼となった。鬼となったテンバ・ツェリンはサムイェーまで飛翔してツィマラを追放してそれに成り代わることに成功する。この状況に困った人々はテンバ・ツェリンの霊と交渉を行い、また高僧の祈祷などにもよってサムイェーから退出してもらうことに成功した。その後、テンバ・ツェリンはサムイェーからチュシュルに戻り、チュシュルの地方神の首領となった。だがなおもテンバ・ツェリンは危険な存在であり続け、毎年正月のモンラム大祭が始まる頃にはラサを訪い、パルコルおとの東にあるカルマシャー神殿を強襲して、ラサの町の守り神の一人であるカルマシャーの隻眼の護法神チャティ・チェンチクをラ

サの北方へと追放して神殿を乗っ取り、ラサ市を徘徊していた。そこでモンラム大祭の期間中、チベット政府からラサの権力を移譲されるデブン僧院のゲクー（俗に鉄棒ラマと称される司法僧官）たちはモンラムの開始前にカルマシャー神殿を訪れ、二十一日間に亘る大祭の期間中にテンバ・ツェリンが暴れださないように祈祷を行い、カルマシャーの神像をラモチェ寺に避難させる習慣が存在したという。

- ・説話D：これは説話Bにかなり近い。テンバ・ツェリンは実在したチュシュルの若者で、ダライ・ラマ八世の遷化後にチベット政府の支配に反逆して殺害されたが、怨霊となってラサで崇りをなした。そこで恐れをなしたチベット政府は高僧に加持祈祷を行ってもらうことでその魂をラサのカルマシャー神殿に封じ込めることに成功した。その後、彼はチュシュルの地方神として祀られ、以後チュシュルの民衆は生死や吉凶を司る神として彼を崇めた。今日もなお、テンバ・ツェリンは正しく敬意をもって敬えば人々に善をなすが、ないがしろにすると災いをもたらす危険で強力な神であるという。

このテンバ・ツェリン説話は、チベット人が死後の行く末や異界についてどのような観念を抱いているのかを鮮やかに示す格好の事例といえる。従来、チベット人の死生観が問題となる場合、研究者も、またそうではない一般のチベット人も、仏教的な死生観を前提として語る傾向がある。だが実千代氏の採録した怨霊話は、そうした仏教的な表象によって糊塗されてきたチベット人のよりリアルな死生観と神霊観を示しており、我々がチベットの基層文化に触れるための貴重な素材である。以下、簡単な比較考察を行いたい。

チベット神霊論

まず星実千代によって採話された説話Aは、同氏によって構想されたチベットの神霊論を過不足なく表現するものであると言える。その基本構造を簡潔にまとめれば、人が恨みを残して死ぬと超常的な力を備えた怨霊（ドンデ）となって崇りをなすが、人々（とりわけ高僧）がその怨霊を正しく祀ると怨霊は神（ラ）となって人々を守護するようになるというものだろうか（Hoshi 1983）。夭逝、事故死、病死、戦死、刑死、逆縁の死などを分析的に異常死と呼称するが、このような現世に未練を残すような死は、残された生者にとって受け入れるのが困難な非常事態であり、こうした非常事態としての異常死にどのように対処するかというのは、個人を超えた社会的な問題である。それゆえ世界の様々な文化において、こうした異常死に対処する文化的・社会的な機構というものが存在する。広く見ればチベットの神霊論もそのような異常死への対処としての意味合いを持っており、その上で人→怨霊→神というこの構造は多くの文化で観察される。特に実千代氏によって見出された異常死→怨霊（ドンデ）化→高僧による介入→神（ラ）化というチベット・モデルは、漢民族の民俗的神明論における「神・鬼・祖先」モデル（cf. 渡邊 1991）と興味深い類似および相違（特に祖先観について）を示しており、この比較研究は興味深い課題と思われる。説話Aはこのようなチ

ベット神霊観の基本構造がかなり明快に看取できるものと言えよう。この点では説話BCDも同じ構造を持っているが、説話Aのそれが最もシンプルかつ明確にこの構造を備えていると言える。

歴史性の問題

続けて説話AをBCDと比較してみよう。まず目につく違いとして、説話BとDにおいてはテンバ・ツェリンが歴史的に特定の時代に活躍した実在の人物として扱われており、説話BとDが歴史性を強く持っていることが挙げられよう。テンバ・ツェリンを征伐したデモ・ホトクトは十八世紀の後半、ダライ・ラマ八世の没後に摂政（ダライ・ラマの幼少時にチベット政府を統括する代理王）として即位した人物である。なお、重要なことだが、説話BCDが採話されたのは中国統治下にあるチベットでのことであり、それが「チベット政府への反抗者」というテンバ・ツェリンの歴史的な位置づけにも影響している可能性もあるだろう。チベット政府の統治の過酷さを強調するという意味では、この語りは現在の中国統治下のチベットでは語りやすいものであり、逆にチベット動乱以前には語りにくい性格を持つものであるからだ。

また他の興味深い相違点として、説話Aでは最後にテンバ・ツェリンはサムイェー僧院に祀られて話が終わっているが、BCDではテンバ・ツェリンは今日もなおチュシュルに留まって在地の地方神として君臨していることになっている。テンバ・ツェリン物語は単にチュシュルという一つの地方社会を超えてラサでも流通しており、この説話の持つ広がりを示しているだろう。その中で、説話Aは民話としてある種の安定的な形態となっており、むしろテンバ・ツェリン説話の完成形なのだというのが筆者の考えである。

考察と暫定的な結論

説話BCDにおいては、テンバ・ツェリンはまずは実在の人物として扱われ、超越的な存在によってではなく、チベット政府という現実の存在によって現実の歴史の中で殺害され（あるいは自害し）、死後において怨霊となり、その後には神となっている。後者の説話に見られるのは、「歴史から神話へ」というダイナミックな動きであり、神話生成の現場を示す事例であると言えよう。

それに対して説話Aでは、物語の当初からテンバ・ツェリンとは別の神の存在が所与のものとして語られており、人・怨霊・神の往還は物語の中ですでに安定した形態として存在し、テンバ・ツェリン以前も以後も繰り返される構造の中に位置付けられている。この説話は最初から非歴史化され、神話世界の中において完結したものとして示されている。それゆえ、チュシュルというローカルな文脈を超えて複数のバージョンが語られ、無名の民衆による集合的な解釈と編集が施される中で成立したのが説話Aの形態である、というのが暫定的な筆者の結論である。

テンバ・ツェリンの物語は、このように歴史と神話のはざまをたゆたいながら、仏教的な表象によって糊塗されてしまい、チベット人自身によっても見えづらいものとなっている民衆の世界観を我々に伝えてくれる格好の素材であった。

参考文献

- ・ Hoshi, Michiyo ed., 1983, *Texts of Tibetan Folktales*, vol.3, Tokyo: Toyo Bunko.
- ・ 廖東凡, 1998, 「丹巴沢凌, 復讐的鬼雄」, 『雪域西藏風情録』, 拉薩: 西藏人民出版社.
- ・ 渡邊欣雄, 1991, 『漢民族の宗教: 社会人類学的考察』, 東京: 第一書房.

朱瘦菊『新歇浦潮』における自動車と女性の描写について

神谷まり子

社会小説『歇浦潮』(1921年)の続編として、翌年上海の通俗文芸雑誌に連載された『新歇浦潮』には、自動車に関連したシーンが数多く登場する。作品のなかで自動車は、1920年代の発展期における豊富な描写とともに、富裕層や当世風人物たちの傲慢と虚栄、都市の悪徳を浮き彫りにしていた¹⁾。一方、前作が1910年代の政治背景や歴史事件、実在の人物を配置しながら社会を広く概観していたのに対し、続編では主人公の張大小姐と周囲の女学生をめぐる描写が中心である。本報告では、中国文学における最初期の「自動車小説」とも言える朱瘦菊『新歇浦潮』において、自動車に関する描写が女性像とどのように関連づけられ、またそれらが作品のなかでいかなる意味を持っていたのか、検討する。

朱瘦菊(1892-1966, 筆名に海上説夢人)による『新歇浦潮』は、『紅雑誌』に1922年8月から1924年7月にかけて連載され(第1-98期)、のち1925年に世界書局から出版された(全九十回)。ストーリーは、上海に暮らす高官の娘、張大小姐と妹の二小姐を中心に展開する。姉は華美な服装に身を包み、資産家夫人や子弟らと自動車に乗って昼夜遊びまわる女性であるのに対し、女学生の妹はピアノや読書が趣味の、質素でもの静かな性格の持ち主である。姉妹の日常を軸に、奔放な異性関係を繰り返すTT(方愛珊)、GG(凌華壁)、BB(呉瑪麗)らの恋愛事情が配されることで、物語は進行してゆく。作品中盤において、張大小姐は父親の遺産の生前分与によって念願の高級車を手に入れる。だがお抱え運転手や資産家御曹司との交際、高価な装飾品の購入によってついに金を使い果たした彼女は、母親とともに父親のいる北京へと旅立ち、小説は幕を閉じるのである。前作『歇浦潮』に登場する女性たちの多くが、娼妓や娼妓上がりの妾たちであったことを考えれば、『新歇浦潮』では前作にはほとんど登場しなかった女学生を含む女性たちがタイプ別に細かく描かれており、これらの新事象が中心となっていく際に頻りに登場するようになるのが、自動車であった。

上海における自動車の歴史は、1901年にハンガリー人、リンツが初めて二台の外国車を輸入したことに始まる。以後、自動車の台数は増加し、公共租界工部局に登録の台数は1920

年に1899台、1935年には10292台にまで急増した²⁾。運転免許制度は1910年代には確立されていたと考えられ、運転手に対して厳しい審査と取り締まりが行われた³⁾。『新歌浦潮』では、租界の表通りでは時速15から25マイル（時速約24キロから40キロ）しかスピードを出すことができず、また運転免許には車の所有者用と運転手用の二種があり、うち後者は厳しい資格審査があったことが記されている（第十八回）。

自動車の発展期にあった1920、30年代において、実際の購買層は富裕層や外国人に限られ、運転手つきで高級輸入車を購入、利用するケースがほとんどであった。所有が一部の富裕層に限られていた時代、それは「実際の移動というよりも余暇活動や人びとへの誇示のために用いられる」、「裕福さの象徴」であり、一般庶民からはあこがれと同時に「敵意と反感」をもって迎えられるものだった⁴⁾。自動車が常に厳しい世論に晒されていたことは、『新歌浦潮』において金持ちらの起こす交通事故を描写した部分に顕著に表れている（第六回）。

①モダンガールと自動車 —— TT, GG, BB

作品中に登場する自動車に関連するエピソードは、その多くが富裕層の傲慢を象徴するものであったが、同時に奔放な男女関係を演出する重要な手段でもあった。例えば第十三回、放蕩児の周少雄とTTが初めて出逢う場面では、それぞれドライブの途中で相手を見かけ、相次いでデパートに入ったところで意気投合、のち連れ立って映画館、そしてホテルへと赴く。TTは英語を自在に操る元女学生でありながら、金欲しさに高級娼館に出入りする「女学生なのか、娼妓なのか判断しかねる」「蕩婦」として、語り手の痛烈な批判の対象である（第十三回）。TTのように、女学生出身で奔放な異性関係を持つ女性は、ほかに金持ちの馮五爺に囲われるGGや、未婚の母でありながら外国人の悪克司（エックス）と半ば同棲生活を送るBBがいる。これらの女性たちに共通しているのは、西洋式の教育を受けた経験があるか、もしくは外国（語）に精通しているという経歴であり、多数の男性たちと同時に関係を持つ性的奔放さを暗示させる部分だろう。一方、墮落した女学生という女性像にはもう一つの共通点、すなわち自動車に乗ることを好むという傾向があった。TTらはたびたび男性の車で映画館や郊外へのドライブを楽しみ、BBは自宅に迎えに来たエックスの車でホテルへ通うのである。民国期上海の通俗メディアにおいて、車に乗る女性はスポーツやダンスなどとともに身体の近代化を象徴し⁵⁾、人々の羨望を集めるモダンでファッショナブルな存在であった。『新歌浦潮』において女性が自動車に乗ることは、享乐的で新奇なものを好むという性質を表すと同時に、身体の「移動性」、すなわち複数の男性と性的な関係を持つ行為を暗示している。

②所有物としての「身体」 —— 張大小姐

張大小姐は学校に通ったこともなく、普段は観劇や麻雀をして過ごすことを好む「純中国派」「旧女性界の人」（第十四回）だったが、第五十一回、両親が決めた縁談を拒否すると、

妹と装って婚家に入り込み、婚約破棄を宣言する。「……今は民国の時代です、もう清朝ではないのです。政治でも民意を問う時代なのですから、結婚は言うまでもないわ。当事者どうしの同意を経ないなんてことがあるかしら」。1910年代後半以降、五四新文化運動において封建的家庭制度からの解放が叫ばれるなか、中心となったのは親の取り決めによる旧式な結婚への抵抗であり、張大小姐が繰り返し主張する「自由退婚（親の決めた婚姻を破棄する）」「自由配（自ら結婚相手を選ぶ）」も、この時代に盛んに叫ばれるようになったスローガンであった。張大小姐はTTらのようなモダンガールではないものの、新しい時代の女性たちの理想を身をもって実践しようとする。他方、これらの主張は都合良く利用されているだけで、実際は理想の婿を求めて意中の青年らと気ままな交際するための口実に過ぎないという面もあった。このような個所には、女学生やモダンガールたちが標榜する「自由」や「文明結婚」などが、終始揶揄の対象として描かれる社会小説の定式が継承されている。

娘に立腹した父親から勘当を申し渡されると、逆に彼女は遺産の取り分を要求し、そうして手にした金で購入したのが、高級外国車であった。「張大小姐が最も心酔していたのは、容姿端麗の青年と美しい自動車である」（第五十七回）。ここで最新鋭のオープンカーは、美青年たちやダイヤの指輪と同様、彼女の所有欲を満たしてくれる「所有物」である。張大小姐と自動車の関係からは、自動車の「車体」と男性の「身体」という二つの「body」に対する、女性のあこがれと欲望を見い出すことができる⁶⁾。作品中、彼女は理想の結婚相手を探すべく、資産家の息子、周少雄や彭次珊などと交際するが、自動車購入がきっかけで一時親しい関係になったのが、自動車運転手の小張であった。女性主人が運転手の運転する車に乗ることは、家族以外の男性と狭い空間で過ごすことを意味し、従来の階層の危険な「混乱」をもたらした⁷⁾。張大小姐の場合、自動車と男性を所有することは旧来の「家」や階級を超えることを意味したと同時に、それによってもたらされた「自由」はTTらと同様、「放蕩」「淫蕩」へつながる可能性をも示唆しているのである。張大小姐と自動車の関係において、新／旧、良／悪の価値基準がきわめて曖昧で不明瞭な「自由」が暗示されている。

結語 —— 自動車に乗らない女性たち

妹の二小姐は、姉に誘われて希に自動車に同乗することはあるものの、男性から誘われても断り、もっぱら利用するのは人力車であった。作品冒頭、彼女には俞蘭芳という恋人がいたが、彼がGGと懇意になったために婚約を解消し、傷心のあまり一時独身主義を標榜する。だが物語終盤、文通相手だった黄という青年と「自由訂婚（自由結婚）」（第八十九回）し、幸せな結婚を手に入れる。民国初期の社会小説において女学生の「自由結婚」が肯定的に描かれるのは極めて稀であり、上に論じた女性たちとは対照的に、自動車に乗ることをあまり好まないという性質は、二小姐の感情的、身体的「非移動性」を表している。

『新歌浦潮』に登場する張大小姐やTTといった、新しい時代の主張を口実に男性と交際を繰り返す女性や、性的に墮落した女学生といった描写は、自動車の描写と同様、都市におけ

る人間の虚偽と虚栄を描く社会小説のテーマが大きく反映されている。一方で指摘すべきことは、作品の結末、張大小姐らは過去の行いから「足を洗う」ことで物語の舞台からあっさり退場する。これらの女性たちは語り手によって処罰の対象となっておらず、そのために作品が道徳談となることを回避しているのである。二小姐を始めとし、同姓不婚の旧い考えが残る時代にあつて従兄との許されぬ恋の末に自殺する魏麗娟や、自由恋愛の末に妊娠、墮胎を強いられる呉国良といった女学生たちの追及する恋愛には、「自由」には様々な悩みや困難、時には悲劇さえ伴う場合があるということ、正面から捉えたものであった。作品は「自由」を手にしつつある女性や自動車のもたらす新たな社会に対し、何らかの判断やあるべき姿を示していたというより、新しい事象に対して人々が見せた複雑な心性、すなわち近代の消費主義と社会変化に対するとまどいや反発、「理想」に対し「現実」を注視しようとする気持ちが反映されていたと考えられる。

植民地ハルピンと女性表現——上田としこと佐多稲子の傾向

久米依子

1.

東アジアの20世紀の社会状況を背景に生まれた日本の文化を、植民地政策、ジェンダー、文学および児童文化の点から考えた時、上田としこと佐多稲子の仕事は、時代性を色濃く帯びた特別な例として浮上する。

上田としこ（1917-2008）は、戦後に先駆的な女性漫画家として活躍した女性である。上田の父親上田熊生は、満州ハルピンに渡って成功した実業家で、上田は少女時代からハルピンで育った。その後女学校進学のため母や兄弟たちと東京で生活し、兄を介して人気挿絵画家の松本かつぢに紹介されて師事し、挿絵・漫画の世界に進むことになる。父親は娘の仕事にあまり賛成していなかったが、上田は独学で絵を勉強し、子供向けの雑誌や新聞に挿絵が載るようになる。家族がハルピンに戻ったあとも東京で一人暮らしを続け、注文をこなしていたが、体調をくずしたこと、漫画家として活動するためにはもっと人生経験が必要だと考え、家族の住むハルピンに戻り、満鉄や新聞社に勤務した。

しかしやがて敗戦を迎え、生活は一変する。ハルピン市にソ連兵が押し寄せ、一時は死を覚悟するが、親しい中国人らに守られ何とか暮らすものの、1946（昭和21）年の強制引き揚げ令を受け、着の身着のまま家族と共に内地へ引き揚げた。その引き揚げ列車が発発する駅頭で父親は連行され、経済戦犯として処刑される。処刑の事実が明らかになったのは、3年後だった。辛酸な引き揚げ体験を経て帰国した後は、一家の暮らしを上田の漫画活動が支えた。特に『少女クラブ』に連載した、活発な中国人少女を描いた漫画『フィチンさん』（1957-1962）が人気を得て、代表作となる。明るくコミカルな作風で多彩な作品を描き、2008年に91才で亡くなるまで、漫画を描き続けていた。

では、代表作『フィチンさん』の特色を確認してみよう。

お転婆娘フィチンは、時代不詳のハルピンの街に住み、父親がハルピン一の金持ちリュウタイ家の屋敷の門番をしている。フィチンは屋敷の主人に気に入られ、幼いぽっちゃんリイチュウの遊び相手に選ばれる。天衣無縫なフィチンは、リイチュウの母親にはうとまれるが、リイチュウには大変慕われる。しかし屋敷の主人が、10歳近く年齢差のあるフィチンとリイチュウの婚約を決めようとした時には憤慨し、「ぽっちゃんのいいなずけなんてかってにきめるのはふるいかんがえでこまります」と抗議する。またリイチュウが馬賊にさらわれた時には、ためらいを捨てて長い髪を切り、百姓の男の子の姿になってリイチュウを助けに駆けつけるなど、自分の判断で果敢に行動する少女である。

旧弊なしきたりに縛られず、主体的に考えて男子顔負けの活動をし、しかも優しさもある明るいフィチンの姿は、当時の日本の少女読者の憧れとなったようで、大変な人気を博した。新しい戦後社会が始まった時代とはいえ、まだまだ女子の生き方は不自由で、家庭や学校に束縛されることが多かった時期に、伸び伸びと行動し、大人に対してもしっかりと自己主張するフィチンの姿は、女子の願望を満たすパワーを見せていたのである。

『フィチンさん』の連載の前年まで、『少女クラブ』には手塚治虫の、男装のプリンセスを描く漫画『リボンの騎士』(1953-56)が連載されている。両作の人気は、この時期の女子に、男子のようにもっと活動的に大胆にふるまいたい、という願望があったことを窺わせる。ただし『リボンの騎士』をはじめ、当時の少女向け漫画や物語のジャンルが、基本的に西欧志向であったのに比べ、『フィチンさん』は中国を舞台にアジア人の少女を開放的に描き、東洋の少女が制約を乗り越えていく可能性を開いたという点で、画期的だった。

しかし、この『フィチンさん』で気になるのは、中国人、ロシア人は登場するが、日本人がほとんど描かれないことである。フィチンの友人として二人、それから正月号の回に着物を着た少女がちょっと出たくらいで、物語の本筋に日本人がいっさい絡まない。

上田は、フィチンさんと共に遊ぶハルピンの生き生きした子どもたちを描きながら、日本人社会を描くことは避けたと考えられる。むしろ中国人少女フィチンの中に、かつてのお転婆少女、上田としこ自身の姿を溶け込ませ、日本人と中国人の合体した像を動かしたかったのかもしれない。それによって、美しき国際都市ハルピンを崩壊させた、国家同士の争いの記憶——それがひいては父の死を招いたという深い傷の残る記憶——を、消そうとしたとも考えられる。そして回想の中の二度と戻らぬハルピンの姿を、明るい少女向け物語によって再構成し、現実を超えた理想のイメージを組み立て、戦後の日本から価値づけを試みたといえることができる。

晩年のインタビュー(2004)⁸⁾で答えたように、上田とし子は戦後、中国の他の地域は訪れたが、父が殺された辛い思い出のあるハルピンを、決して訪れようとはしなかった。その代わりに『フィチンさん』を描いて、自らの過去を愛らしく暖かい世界に仕立て上げたといえそうである。

しかしその描き方は、同時に、日本人の戦前戦中の所業を棚上げにし、植民地の歴史を消去して、日本人を透明化する方法でもある。帝国主義日本の植民地政策の功罪は問わずに、ファンタジックなユートピアを提示し、愛惜したとも評せよう。

2.

このように、植民地時代の日本の在り方と厳しく向き合うことのない表現は、上田と親交のあった女性作家・佐多稲子（1904-1998）の文学作品にも見出せる。佐多は昭和期を代表する著名な女性作家であるが、戦中期（1941 [昭和16]）年に、新聞社の招きで初めて満州を訪れた時、ハルピンで上田としこの母、総子を紹介された。佐多ははじめ総子を、何不自由なく暮らす豊かな実業家婦人と見たようだが、総子は佐多と幾日か交流した後、夫が別に家庭をもち、それ以来二十年、夫婦の関係を断っていると告白する。自身も夫の不倫に苦しんだことがある佐多は総子の告白に衝撃を受け、旅先のホテルですぐに小説化した（短編「旅情」、『中央公論』1941年9月）。以降、上田家と佐多は佐多が亡くなるまで関係を保ち、佐多が上田家をモデルに長編『重き流れに』（1968～69）を連載した時には、参考資料として、引き揚げ体験のスケッチをとしこが提供している⁹⁾。

佐多は、少女時代から様々な職についた後にプロレタリア作家としてデビューし、戦後も松川事件の被告を支援するなど、社会派の作家として認められていた。しかし上田家を描く作品では、最初のモデル作「旅情」以来、上田総子の「悲しい」女の生き方を焦点化する。異国の地で夫に逆らいながら年月を送った妻の立場を思いやり、異国でも日本的ジェンダー制度に苦しみつつ、夫を拒んで抵抗したその「誇り」と「殉教徒のような切実なもの」（「旅情」）に感銘を受けながら、しかしその総子（小説中では宮前夫人）について、しきりに「悲しい」女性という表現がなされる。「悲しさを湛えている」夫人を見て「辛い悲しさにおそわれた」という言葉が、「旅情」の最後の場面で重ねられている。そのような同情は、日本の家父長制を問い直すよりも、犠牲者として妻を憐れむまなざしがまさっていたと考えられよう。

佐多は戦後にまた、上田熊生の処刑の報道を契機に、短編「伴侶」（『小説公園』1953年8月）を書く。この小説では日本帝国主義の侵略思想にも触れ、上田夫人の生を「帝国主義日本の歴史の内側に織り込まれ」た「女の歴史」として、語ろうとする。にもかかわらずやはり小説は、戦争に負けたために別宅の女性と別れた夫と、ようやく共に生きられることになったまさにその時に、夫が処刑された妻の悲劇のドラマとなっている。「外側からの運命に」耐え、しかし報われなかった「女の運命の悲しさ」が強調されたのである。

こうした描き方の問題は、長編『重き流れに』（1968～69『婦人之友』連載）にも引き継がれる。連載期の佐多は60代、戦争中に時局協力的な仕事をしたことを十分に反省し、社会派の女性作家として名をはせていた。したがってここで、「帝国主義日本の歴史」と上田家の経験を描き尽くし、日本の侵略戦争政策の責任を問いながら、激動の時代を生き抜いた人々の人生を描き出すこともできたはずである。

しかし『重き流れに』は、そうした重厚な作品とは、今一つ認められなかった。小説は、幼な妻として渡満し、四人も子をなしたが、夫が別宅を作り裏切られた妻（尚子）の悲嘆を中心に語られる。戦争へ進む時勢にも触れるが、それがすぐ「女というものの胸の内は、悲しい想いを抱いていれば、すべてが悲しいだけであった」という文に接続され、女の悲しみの問題に焦点が移ってしまう。

夫に生活面で頼りながら夫婦関係は拒絶する妻尚子の、濃密な女の愛憎と悲哀が語られ続け、合間にさし挟まれる植民地ハルピンの政治的・社会的情勢は、それと絡み合わない。私的領域は公的領域の政治性のもとに規定されるはずであり、この小説の人間関係でいえば、尚子が受動的な妻の立場から脱せずに、夫の仕事や女性関係に従わざるをえなかったことと、一家が国家の大陸戦略に巻き込まれていくことはおそらくパラレルなはずである。しかし小説にはその構造化と問題の追及が見られなかった。

佐多自身は自らを、戦時中「時流に乗っ」て時局に協力的な行為をしたことを「背信」と断罪した¹⁰が、その厳しさをもって、植民地の日本人を描くことはなかった。佐多もそのことを自覚し、全集のあとがきで『重き流れに』に対する当時の評価に関して、「私の表現はナショナリズムを感じさせるものだったろうか」と自己批判している¹¹。

大陸満州の都市ハルピンがとりもった、二人の女性表現者は、共に旧弊なジェンダー制度に囚われず、時代に先駆ける仕事を残した。そして日本社会の枠、国境を超えた物語を生んだが、どちらの物語も、ポストコロニアルな視点を含むには至らなかった。ジャンルを問わず、植民地支配の側からの物語がはらむ困難を、ここには見ることができる。

「文学」の歴史と如何に対話すればよいのだろうか

——『文学史以後の文学史—韓国現代文学史の解体と再構成』を手掛かりに——

高 榮蘭

近年、日本語空間において、日本語で受容されたテキストを対象とする「文学史」の編纂をめぐる大きな企画が動いているというお話はあまり聞かない。出版社主導の講座シリーズもあまり見られない。しかし、その一方で、教育現場で「文学史」という枠による授業の必要性が消えることはなく、「日本文学—国文学」系の大学院入試では文学史に関する知識が問われ続けている。その場合、内容のレベルで大切にされるのは、特定のテキストに依拠するというより、授業を行う側、試験問題を作る側の研究経験や教育経験に基づいた感覚である。もちろん、その感覚自体は歴史的・文化的な文脈から自由ではない。教える／教わるという関係性のなかに閉じ込められ、新たな情報の更新が行われない、まるでゾンビのような生き物としての「文学史」。それに対する戸惑いが日本語空間だけの問題ではないことを、韓国の近現代文学をめぐる『文学史以後の文学史—韓国現代文学史の解体と再構成』（千政煥・蘇榮炫・林泰勲編、プルン歴史、2013）から確認することができる。ここでは、日本帝

国の支配の記憶を抜きには語れない韓国の近現代文学の歴史をめぐる本を、いま・この日本語空間の問題として引き受け、対話を試みるための準備作業をしてみたい。

まず、「はじめに」に基づいて、この本のコンセプトを確認しておきたい。タイトルの「文学」とは「韓国現代文学」のことであり、「文学史以後」は「近代文学の終焉」宣言以後の、韓国現代文学通史の書かれなかった時代を意味する。韓国文学史が書かれなくなった理由については、文学史とは総合的な知識と歴史に対する一貫した観点に基づいて書かれるべきものであるのに、これまで「文学史」を支えていた認識論が古くなってしまったからだという。すでに死亡宣告を受けた知の体系が抑圧となり、いま・ここで効力を発揮する状況への疑問から、この企画が出発していることが強調されている。

新たな「文学史」をめぐる模索は、制度的な規範の強い教育現場から離れた空間からスタートしている。「文学史以後の文学史」という有料講座がプルン歴史アカデミーという市民のための人文学空間で、2011年11月から2012年12月までの間、毎週月曜日午後7時30分から10時まで行われた。この本は、第5シーズンまで続いた講座の第1・2シーズンの講義と議論をそのまま掲載する形をとっている。出版元は講座が開かれた場所を提供しているプルン歴史という出版社である。プルン歴史アカデミーでの講座企画がすべて単行本として出版されているわけではないことを考えると、この講座が最初から出版を目標としているとは言いにくい。

この本は、歴史書でよく採用される編年体の形式をとらない。また、企画側があらかじめ「文学史」記述に必要な項目を決め、それに基づいて依頼をしているわけでもない。ここに参加する研究者、創作者、批評家個々人がこれまで蓄積してきた言葉の束を紐解く場、すなわち、それぞれの研究や創作に「文学史」というキーワードを与えた時、どのような新しい展開が期待できるのか、それを試す場になっている。編者や著者は、本のコンセプトと同様、2000年代以後に研究の場に参入した人々がほとんどであるため、30代から40代という比較的若手の研究者で構成されている。

編者側が前景化させているのは「民衆の文学史、女性の文学史、ネットワークとしての文学史、下からの文学史、非線形的な文学史、トランスナショナルな文学史」への模索である。少し長くなるが、目次を紹介しておきたい。第1部「文学史をみる異なる観点」：權ボドゥレ「文学の散布あるいは文学の孤独—3・1運動前後から今を眺める—」、千政煥「サルタンは書くことが出来るのか—文学と政治」をみる異なる観点と民衆文学の復権」、蘇榮炫「文学史の他者たちを捉えなおす—文学史から文学史「たち」へ」。第2部「新たな問題の枠組みから読む韓国現代文学史の論点」：李惠鈴「植民地時代の小説を読み直す—廉想涉文学を通してみた植民地の語りと社会主義者」、辛炯基「1960年代の「物語」と4・19、5・16革新言説の行方」、權明娥「文学「共同体」の外部にいる書き手の文学物語—文書庫と生のあいだの文学」。第3部「複数の文学史と異なるジャンル」：白文任「文学史と映画史—林和が朝鮮映画について語ったこと」、李英美「言葉の文学／文章の文学、韓国文学史の新たな枠組みをつくる—「裸

足の青春」と「椿の乙女」], 鄭ヨウル「ファクション共和国で歴史小説を読む」。

目次からもうかがえるように、ここでの問いには日本の近現代文学研究との接点が大いにある。例えば、3・1独立運動によって可視化される同人誌やメディアの問題（権ボドゥレ）、1980年代における下位主体としての女性労働者と文学実践の問題（千政煥）、村上春樹の受容を手がかりとしながら「翻訳」を媒介とする民族や言語の境界を超える形で編成される文学史と移住労働者の問題（蘇榮炫）、「社会主義者」表象の不／可能性や「日本人—植民者」表象の不／在の問題（李惠鈴）、1960年の4・19革命の主体による手記の分析の問題（辛炯基）、第一世代フェミニストによる「シングル・ライフ」という政治的決断をめぐる表象と現代女性作家による文学実践の問題（権明娥）などがそれである。本書に散りばめられたキーワードから浮かびあがるのは、日本近現代文学研究においても展開された、読むことと書くことのあいだを問う読者—共同体をめぐる研究、綴り方、サークル誌などの研究、ジェンダー研究、サブカルチャー研究との対話の必要性である。

日本帝国の植民地であった時期と、「村上春樹」の受容が生じた2000年代以後を同じ土台で捉えることは出来ない。蘇榮炫は、韓国における「村上春樹」現象は韓国文学の新しい書き手の不在、そして中堅作家のスランプの重なりから抜け出すための市場戦略の両面から考えるべきだという。蘇が注目しているのは、春樹の成功が新たな書き手の出現と彼ら／彼女らの小説の書き方に如何なる影響を与えていたのかである。その意味において、村上春樹は韓国文学史の枠組みで考える作家になるのである。それは植民地の書き手、帝国の検閲システム、植民地生まれの書き手が活躍した1960年代とは明らかに違う文脈である。また、この現象を喜び、優れた・面白い日本文学の東アジアにおける成功例として捉え、「世界」各国の事例とともに並べるといふ単純な発想に陥ってはならない。

この本の中で交錯している「過去」と「現在」には「日本」「日本語」「日本文学」「日本人」が細かく散りばめられている。しかし、はたして日本近現代文学の研究方法との同時代性が見られる『文学史以後の文学史—韓国現代文学史の解体と再構成』との対話の土台が、日本の近現代文学において用意されているのだろうか。むしろ、植民地や東アジアの問題を「日本語文学」という用語やポストコロニアルという概念で括り、過ぎ去った流行として忘却しつつあるいま、韓国から発信された韓国近現代文学の歴史は見なくてもよい、考えなくてもよい、過去の研究方法の範疇として処理される危険性があるのではないだろうか。この現象とはあきらかに異なる形で、人文系の生き残りをかけた競争的—狂騒的な研究資金の獲得が生み出す様々な国際会議の場は膨大に増え、異なる言語圏を生きる研究者の出会いの場は増えつつある。しかし、それが、お互いの国家・領域の尊重を担保とするものになりやすいことを考えると、この本を媒介に強く意識させられる「非同時的なものの同時性」の感触に如何に応答すべきなのかは、「われわれ」に残された課題でありつづけるだろう。

20世紀初頭の文芸ジャーナリズムにおける「編集」の思想

紅野謙介

有楽社に『手紙雑誌』という雑誌がある。創刊は1904年3月。この雑誌については、幸田露伴が選者となって手紙文の懸賞募集を行なったことや手紙小説を掲載するなどから、日露戦後の書簡体小説の登場を考える上での前史としてとりあげられることがあった。たしかに、小説の方法としての手紙を考える際には重要な雑誌であるが、雑誌の意義は必ずしもそれだけではない。

ちなみに有楽社の創業者は中村弥二郎という。中村は京都で便利堂書店という貸本業を始め、内村鑑三の『後世への最大の遺物』を出すなど出版に手を伸ばし、東京進出を果たした。絵はがきブームに乗って、コロタイプ印刷の工場を作り、美術出版の先駆けをなした人物でもある。

『手紙雑誌』の判型はB6横判で、横長の変型判である。本文44頁に広告数頁をつけた内容で、決して厚い雑誌ではない。製本も平綴じのくるみ製本で、美術雑誌を思わせるようなスタイルをとった。紙や印刷・製本も当時としてはかなり上質で、銅版による真筆の写真製版も整い、手の込んだ雑誌となっている。

創刊号の「手紙雑誌の序」には、次のように書かれている。

友達の十人も寄りまして、銘々持寄りの御馳走を、内所にそつと一つ鍋に放り込んで、出来上つた御馳走を、闇汁と申し、此会を闇汁会と申します。／此の雑誌は、諸先生に、題も求めず、文体もかまはず、無暗とぶちこんだ、御手紙の闇汁の闇汁会で御座います。……／問題と文体は共に千種万様、「犬の子出産通知」の葉書もあれば「人間至高の最大問題」を論ずる往復文も御座いまいしょう、「御節句の御案内」もあれば「友達仲違ひの仲裁文」も御座いまいしょう「人物評」もあれば「呉服物注文」の実用文も御座いまいしょう「処世の方針を授ける」手紙もあれば「遠征の夫を慰むる」親しき御文の類も出ることで御座いまいしょう。

実際、創刊号では、竹越與三郎「書簡文学に就ての卑見」や伊藤銀月「手紙雑誌に寄する手紙」などの新規依頼の記事のほか、藤原惺窩や豊臣秀吉、源頼朝や尾崎紅葉、正岡子規、澁澤栄一といった古今の有名人や、政治家、企業人、無名の女性や出征兵士などの60篇以上の手紙が次から次へと横並びで収録されている。手紙のアンソロジーだと言っていいだろう。なかには編集者の安孫子自身が子どもの誕生を有楽社の社主・有楽生（中村の号）に伝えた私信と、有楽生からの返信まで、活字を小さく落とした上で紹介されているのだ。

文体もまた「千種万様」となっている。「漢文体」もあれば「候文」「翻訳体」，「言文一致」もあれば「古文体」もあるというわけだ。「序」はさらにこう言う。

此様の次第で、一頁を開く毎に、題目と趣味が輾転変化致しますから、態と巻首に目録を附けませず、読み来り読み去て點頭致させる事と致しました、但し一年十二冊の終りには「分類」と「順序」を附けまして題目の索引に御便宜を与へましょう。

この「目録」すなわち目次をつけない方針はさすがに無理だと認識したのか、12冊目までいかず、翌月の第2号にはもう目次が付されている。しかし、この目次まで外したこと、すなわちアンソロジーとして集められた手紙のテキストを、そのさまざまな「題目と趣味」ともに誌面の「輾転変化」するさまを読者に提示しようとしたその編集の思想に注目する必要がある。

第2号を例にあげてみよう。この号は、第一号が各新聞から「非常の御賛評」であったことを紹介し、「未曾有の珍雑誌」という評価を受けてつくられている。

巻頭の口絵写真は、西郷隆盛が大久保一蔵（利通）に宛てた上野彰義隊をめぐる書翰の影印で、頁の裏に翻字と短い解説が掲載されている。もちろん、西郷直筆の影印はみごとな書の筆遣いを伝え、裏にまわれればその内容を読み下すことができる。候文のうちに伝えられるのは、彰義隊の立てこもりと官軍とのこぜりあいがつづき、攻撃の沙汰が出るまで我慢させられているという経過報告である。このやりとりは、編者のキャプションで日露戦争開始前の日本の忍耐に重ねられながら、「日本帝国の公明正大」を語るエピソードにされている。

本編の最初は、匿名の「某実業家に与ふる文（戦後の経営）」という3頁にわたる長文の手紙。はやくも日露戦後の満州経営についての提言をつらねた内容で、実業家、資産家が「島国根性」を脱して、満州事情を的確に把握する必要を説いている。いささかヤラセくさくもあるこの手紙のあとにつづきのは、名だたる「実業家」であった大倉喜八郎がオーストリアの代理公使シーボルトに宛てた「桜花満開に候へば（晩景御遊覧旁）」という向島の別荘へ花見に誘っている手紙で、翻刻文のあとに「喜八郎」の署名だけが直筆の木版刷で挟み込まれている。このあとは金成兵助の「米国渡航の準備如何」という、渡米移民を予定している知りあいへの問いかけの手紙がつづき、さらに山縣五十雄の紹介をつけて在米詩人「野口米次郎氏の書簡」が英語の原文と和訳文とを並べて掲げられている。つまり、古今の戦争のエピソードに始まり、日本と海外を結ぶ交流に関する手紙があとを受けているのだ。このあとは大倉の手紙を受けるように、花見への誘いと断りの手紙がつづき、一転してこの春に召集をうけた兵士の出征直前に友人に送った手紙と、武將武田信玄が京都の曼珠院座主に宛てた就任祝いの手紙が来る。

当然にも前線の兵士からの手紙も多く収められているが、編集者は新聞などで「既に御覧済も御座いませうが少し編輯に注意した事も御座いますから或は御見直しが出来ませう」と言い切る。悲壮な兵士の手紙も、新派の俳優が朝鮮の京城を旅行し、「芝居材料」を十分に得たという報告の手紙や、秀吉に随行した千利休が小田原から古田織部に宛てた「花筒」を贈ったときの手紙「陣中の韻事」のあとに置かれると、すっかり新聞とは異なるコンテ

ストをつくりあげることになる。

あるいはまた、旅順港閉塞戦で戦死する杉野孫七の父親宛の手紙が「勇士の遺書」として置かれると、東久世通禧が竹柏園・佐佐木信綱に歌の短冊とともに送った「雷雨後月明爽清」という雅な短信へとつづき、このあとに大石良雄が妻子を実家に返したときの「少々存寄も御座候（妻を帰へす文）」があらわれる。ここには大石の直筆の署名と花押が木版で刷り込まれ、つづいて宝井其角が俳友・大高源吾を案じながらつづった「義士夜討を報ずる文」が配されるのだ。こうして広瀬中佐の軍神神話を想起させる杉野兵曹長の逸話は、逆に和歌、俳諧と武士をめぐる歴史的な出来事のなかに組み込まれ、総力戦の熱気とは異なる遠近法のなかに置きなおされる。

手紙の本文も5号から6号、7号までのサイズの異なる明朝活字が材料によって適宜、組み合わせられて、バリエーション豊かな誌面をつくり、ときに欧文活字の横組みが縦組みの和文のなかに平然と折り込まれている。横長の判型は、むしろこうした組み方のために求められたのだ。視線は縦にまっすぐ移動するだけでなく、むしろ横へ横へと広がっていく。ところどころ頁を合わせるための埋め草としてカットが挟まれてはいるが、全体に改頁を指定せず本文を送り込んでいるため、いっそう横断的にテキストの競演状態を呈している。その文体の「千種万様」は、漢字やひらがなの量から来る活字の視覚的効果を演出しているし、手紙を撮った写真と直筆署名の木版は、活字中心の誌面に異なる視覚を呼び込んでいる。ここでは、さまざまな手紙が交わされていたその多様な実態が、序列や階層秩序なく、一望のもとに並列されているとともに、それらの手紙の異なる表情や物質性が綴じ合わされているのだ。

創刊号奥付の「社告」は、「本誌は或る人の道楽的出版を委托されたるものにて都合に依り何時廃刊致候やも難計候へ共兎に角一箇年即ち十二冊は誓つて発行」する予定であると宣言している。ここで示唆されている有楽社のパトロンは、京都西陣の河合長蔵だと言われている。河合長蔵は、おそらく西陣織の織り元として知られる現在の河合美術織物の関係者であろう。だとすれば、京都の伝統産業が東京の出版社を支えたことにも注目されるが、平面に可能なかぎりさまざまな色彩を織り込んだその手仕事の感覚が『手紙雑誌』のカラーズのなかに紛れ込んでいるように思う。

雑誌は1年で廃刊するどころか、1910（明治43）年まであしかけ7年も続いた。発刊してみたところ、予想外の好評だったのである。「何処の新聞でも、非常の御賛評」（第2号前書き）「意外の御歓迎」（『手紙』の懸賞募集 第2号）と、わざわざその意外感に言及するほどであった。この2号には、各紙の批評の一部が抜粋されている。

徒らに春夏秋冬雑などと部門を別ちお極り通りの題を設けてお極り通りの文字を羅列した作文書を読まんよりは本誌の如き趣味と実用を兼て娯楽にも供せられ参考ともなるものを繙くのより勝れることは言はずもがなの事である（『東京日日新聞』）

印刷に於ても製本に於ても洵に優雅美麗なる雑誌也（『中央新聞』）

印刷と用紙などは素敵に上等です鳥渡風変りの道楽気味の雑誌ですが金持なんぞは此様な道楽に金出すとよい（『京都新聞』）

文体と問題とを問はず各種の方面に涉りて各種の階級の人の手紙を輯めたるものにして読過のうちに趣味と感興を得ること少からず用紙も善く印刷も鮮やかに体裁も亦た総べて之れに協へり（『河北新報』）

「金持なんぞは此様な道楽に金出すとよい」という『京都新聞』のくだりは、京都であるだけにこの雑誌のスポンサーを知っての言及だろう。こうして「未曾有の珍雑誌」はその紙質・印刷・製本といった雑誌の物質的要素をふくめ好評のうちにスタートする。まだ開戦の昂揚感のうちにあったとはいえ、その後も大量の死者が陸続と出る日露戦争のさなかに、こうした「道楽的出版」が許容され、「清き家庭の高等なる おもちゃ」（第2号前書き）として受け容れられた。しかも、そのなかに手紙を媒介にしながら、墨痕淋漓たる筆遣いや独特な署名にみられる筆跡から、活字によって浮き彫りにされた種々さまざまな文体にいたるまで文字のテキストの千変万化を、「趣味と感興」を得る「娯楽」としてみせたのである。

『手紙雑誌』の出た翌1905年4月、この有楽社から『東京パック』が創刊されているのは果たして偶然のことだろうか。

『東京パック』は、北沢楽天主筆による漫画雑誌で、近代日本の漫画文化史においてもきわめて大きな位置を占める雑誌である。判型は大型のA4判、全頁オールカラーの多色刷で、すべての頁に漫画が載った。こうした雑誌の先駆としては、1901（明治34）年に宮武外骨が大阪で発行した『滑稽新聞』があり、よく知られている。『時事新報』でコマ漫画を描いていた楽天は外骨に執筆を依頼されたことから『滑稽新聞』に惹かれ、大きな影響を受けた。『東京パック』の刊行も、楽天の外骨への傾倒から計画されたものだった。『東京パック』は1999年に龍溪書舎から復刻されたが、そのときの「解題」で漫画史家の清水勲は北沢楽天と有楽社について次のように書いている。

楽天は外骨から『滑稽新聞』の人気ぶりや編集方針、販売方法などのノウハウを教わり、自分も東京で漫画雑誌を主宰したいという気持ちがたかまっていった。しかし、何より必要なのは資金を提供してくれるスポンサーである。幸い、有楽社の中村弥二郎が理解を示しスポンサーになってくれた。

数度にわたる発売禁止によって東京を去った宮武外骨の『滑稽新聞』が大阪で数万部の発行部数を誇るほど成功を取めたことは、たしかに大きな刺激であったろう。漫画家としての楽天が『時事新報』の時局諷刺を手がけながらも、新聞ゆえの制約から自由になることを計画していたことも想像はつく。しかし、それで有楽社と『東京パック』の結びつきがすべて解き明かせるわけではない。なぜ、スポンサーとなったのが有楽社であったかという問いは依然として解けない。宮武外骨のような特異な個人の問題もさることながら、出版をめぐる

複数のさまざまな条件の重なりがどのように働いたかが気になるところだ。

実際の『東京パック』を開いてみると、たしかにいくつか気づかされる特徴がある。ひとつは、A4判という、この時期には大きい判型の紙面に取り込まれた漫画サイズの多様性である。全頁に漫画を入れるという大胆さは、1頁にひとつの漫画を入れるのではなく、大中小さまざまな漫画サイズを組み合わせた紙面を実現した。当時の漫画は、1コマを中心とし、数コマを組み合わせた物語性のある漫画もあるが、多くは風刺画的な戯画の性格を強く出していた。ストーリーをもたないこの時期の漫画は、線条的に進む物語展開を必要としない。現在のように漫画を読むのに、視線を動かす方向をコマの順序によって規定されていないのだ。したがって、ひとつの頁の上に掲げられた漫画群に対して、読者は視線をさまよわせながら読むという享受法を求められる。

しかも、中綴じ製本のこの雑誌は、真ん中の見開き頁に北沢楽天自身による1枚ものの漫画を入れた。頁を見開きでとらえる発想は、近代以前の整版印刷で培われていたものの、活字印刷の時代には口絵にのみ許されることであった。それを活字全盛期に見開き2頁を一枚のタブローととらえる視線をよみがえらせたのである。やがて週刊誌によって一般化するこの視線をダイナミックに演出したのが北沢楽天だった。

漫画が絵画と決定的に異なるのは、文字との共存関係にある。絵だけによって自立した表現をつくる絵画に対して、漫画は絵とともに文字を添えることによる相互的な意味作用を重要なファクターとした。題名やキャプション、会話が書き込まれるのはそのためだ。しかし、そうした文字の意味作用によって漫画は分かりやすいものになり、ときに一元的な意味の記号と化してしまうことになる。ところが『東京パック』では、驚くべきことに日本語の他に、英語と中国語に翻訳した題名とキャプションが、同じ画面上に並べられたのである。日本語と英語と中国語という、三つの言語が漫画という同一平面のなかに共存する不思議さ。『東京パック』はそれをふつうに実践したのである。

おそらくは、英語の併記は『英文少年世界』以来、『英学界』などの英語教育雑誌を出していた有楽社らしい配慮とも言えるし、日露戦争のなかでかえって英語の必要性を説いたこの出版社の国際的な感覚を示しているとも言えよう。また中国語の併記は、日清戦争後の台湾の領有と、朝鮮半島から満州にいたる中国大陸への植民地主義的関心のあらわれだと言えなくもない。しかし、偶然と必然とがないあわさったほんとうの理由の詮索はさておくとして、結果的に三カ国語が併記されることによって、漫画を見るまなざしもまた複数化せざるをえなかったはずである。機械的な翻訳であったとしても、その共存は同一の漫画を見る英語圏、中国語圏の読者を想定することになる。

それは『手紙雑誌』にあらわれていた「編集」の思想——素材と文体の多様性を横に一望させながら、手紙の物質性を明らかにしていくプロセスとも連続していた。雑誌自体が漫画という分かりやすいジャンルを扱いながら、滑らかな分かりやすさを渋滞させるかのように異なる言語を併記する。それぞれの言語を母語とするものであったとしても、必ず他の言語は

異物として残ってしまう。日本が否応なしに直面していた国際政治のポジションをその表記は示していたのである。

『滑稽新聞』以上に人気を博した『東京パック』は、川端龍子、山本鼎、石井鶴三など、当時の新進画家たちを糾合した。同時に、類似した漫画雑誌の叢生を促したのも、この雑誌である。大逆事件に遭遇するまで、北沢楽天の画筆は政府批判に向かい、のちに「社会主義的」（清水勲）と評価されるほどであった。

しかし、一方、『手紙雑誌』や『東京パック』をつづけてながめたとき、意外なことに気づかされる。この時期の雑誌が多くそうであるように、『手紙雑誌』の巻末には、有楽社の新刊広告とともに、医薬品や化粧品、文房具の広告頁が入っている。この雑誌においては、本誌の内容と広告とは文字の多い頁と図像の比重の高い頁とで、截然と分かれることになるのだが、『東京パック』となると漫画の頁と広告の頁は区分することができなくなる。漫画が文字と絵の組合せであるように、広告もまたほとんど商品名やその価値を説いた文字と絵の組合せによってなるからだ。山本鼎がキリンビールの麒麟のラベルデザインの原案を描いていたように、ときによって広告デザインを手がけ、みずから筆をとって商品の効能を描いた画家と、『東京パック』の画家は同一である可能性もある。

広告は必ずしも商品を正直に宣伝するものではない。香具師の口上よろしく、商品そのものよりも、商品をめぐる語りを売り物にし、広告そのものへの関心を引き寄せる。透明な分かりやすい広告が目される広告であるとはかぎらない。ときに不透明な違和感を演出することが人びとを消費者に変えうる契機となるかもしれないのだ。

これは『手紙雑誌』においても無関係ではない。たしかに広告のような図像中心のはっきりしたレイアウトは存在しないが、先に述べたような写真版、木版、活字版を組み合わせ、文字そのものの多様性を展示する手法や、手紙をその発信者と受信者のコンテクストから切断し、同じ平面の次元に並列し、異なる手紙同士を接続することによって新たなコンテクストを発生させ、その意味を更新していく編集技法は、いっけん現実の社会的生産関係から引き離され、一個の対象として浮き上がらせたものを異なる交換関係に投げ入れる資本主義経済のシステムと機能において同じように見える。まして、自立性の高い物語や随筆を編むのではなく、長いといっても限られた分量しかない手紙を長短とりまぜてコラージュするのである。切断と接続によって手紙は異なる意味をまとわされ、発信者でも受信者でもない第三者によって新たなテキストとして享受される。

有楽社の二つの雑誌は、こうして資本主義経済が離陸しようとしていた百年前に、その社会のなかで作動しはじめていた論理を取り込みながら生み出されたのである。それは彼らが資本制のシステムに依拠したということではない。むしろ、自分たちが組み入れられてしまったそのシステムの渦中であって、推進と批判、加速と減速のアマルガムのうちにあったととらえるべきだろう。

楽天がどこまで関与したかは明らかでないが、『東京パック』が喝采を得ていく日露戦後

に、有楽社は平民社による「平民科学」のシリーズを発行する。1907（明治40）年11月、堺利彦の編著として「平民科学」第1篇『人間発生の歴史』が刊行されるのを皮切りに、山川均による『動物界の道徳』（1908年5月）、志津野又郎による『地球の生滅』（同年7月）、大杉栄による『万物の同根一族』（同年8月）などが次々と刊行された。大杉は後年の回想で次のように言う。

堺と僕とは当時堺の編輯で平民科学といふ題で出してゐた叢書を翻訳してゐた。山川も矢張りそれをやつてゐた。／＼そして丁度此の翻訳が一冊づゝ出来あがつた頃に堺と山川と僕とは満期になつた。（大杉栄『獄中記』、1920年）

獄中で翻訳・翻案された原稿が『手紙雑誌』や『東京パック』と同じ出版社によって刊行されていったのである。堺利彦が第一篇につけた「序」によれば、「科学」には「平民」も「貴族」も「富豪」もないはずだが、この社会では「学問」は「富豪貴族の独占」するところとなっている。そのなかでは「科学」もまた「階級的偏見」を免れられない。いかにして「科学」を「平民」に取り戻すかが、この叢書の掲げた課題だった。まさに階級闘争は自覚されていた。

大逆事件によって幸徳秋水や菅野スガらが処刑されるのが1911（明治44）年1月。生き延びた堺利彦らは売文社を作り、代筆を生業とする仕事を始め、やがて、『へちまの花』（1914～15年）などの機関誌を出す。大杉栄ら荒畑寒村らが『近代思想』（1912～16）を出すのもほぼ同時期である。無政府主義や社会主義が導入され、政府への批判的なイデオロギーが育ってきたが、大逆事件という大弾圧をへて、思想そのものの直接的表明を控えなければならない時代が来ていた。

こうした情勢のすぐとなりで編集デザインをめぐる新たな試行が始まっていた。紙というひとつの平面の上で確実に何かが動き出していたのである。

『婦人公論』のなかの大岡昇平——姦通後小説『雌花』をめぐる——

武内佳代

大岡昇平は、1950年の『武蔵野夫人』のベストセラー以降、1950年代から70年代初頭にかけて継続的に女性読者向けに小説連載をしている。たとえば50年代については、53年に『黒い太陽』を『婦人倶楽部』に連載したのを皮切りに、54年から翌年にかけては『漂う湖』（『主婦と生活』）、57年には後述する『雌花』、59年には『夜の触手』（『週刊女性自身』）という具合にである。一見空隙に見える56年にしても、『神戸新聞』に『午後の誘惑』という如何にも女性読者を狙った中間小説を連載しており、さらに60年代にも、61年に『朝日新聞』夕刊に連載した『若草物語（単行本の際『事件』と改題）』、69年に『毎日新聞』夕刊連載の『愛について』と、同様の連載が見られる。この間、大岡は『婦人公論』誌上で、61年から翌年まで読者投

稿欄にあたる「文章」欄で選評を務め、65年から69年までは女流新人賞の選者も務めている。そして70年には、大岡にとって最後の女性誌連載小説となる『青い光』を同じく『婦人公論』に発表する。

ここからわかるように、50年代から60年代の大岡の作家活動を考えるうえで、女性誌や女性読者との関わりは決して無視できないものである。だが従来の大岡研究では、『武蔵野夫人』を除けば、『俘虜記』『野火』『レイテ戦記』といった戦争体験を基にした小説に議論が集中してきた。ここでは、大岡文学の新たな側面として女性誌との関わりの一端を浮き彫りにすべく長編小説『雌花』を取り上げ、考察を試みる。

『雌花』は『婦人公論』に1957年1月号から12月号まで連載されている。以下、あらすじを紹介しておく。日置栄子は、会社社長の夫・陽造とは冷え切った関係にあり、二年ほど前から新進デザイナーで独身の早川彰と「姦通」をしている。陽造にも愛人がいることを知る栄子は、彰との再婚を期待し、弁護士に頼んで陽造と離婚しようとするが、うまくいかない。栄子は家を出るものの、彰が若い同僚の浅井里子と浮気したことを知り、絶望する。その年の暮れ、彰は何者かに刺殺される。元日になり、里子が亡親の代わりに面倒をみてきた弟の武雄が自殺し、その遺書から武雄が彰殺害の犯人だと判明する。事の次第を知った栄子は、陽造との離婚後、少年保護施設の建設を計画する。

1. 姦通小説ブームのなかで

毎日新聞社の世論調査によると、1957年の『婦人公論』は雑誌全体の中で「いつも読む雑誌」の15位につけており、これは6位の『主婦の友』を筆頭とするいわゆる戦後女性四大誌に続く高い順位である¹²⁾。古河史江の言を借りれば、『主婦の友』が安定多数の読者を獲得しつつ、『婦人公論』の部数伸長もめざましい、というのが五十年代の女性雑誌状況¹³⁾だった。

『婦人公論』は、1916年の創刊時以来、進歩的な「教養雑誌」として女性解放の啓蒙に努めていたが、戦時体制との軋轢で44年3月号をもって廃刊、46年4月には復刊している。同年6月号の編集後記に、「男女同権、女性解放の現実が新憲法の条文より甚だしく遅れている日本の今の段階において、進歩的な婦人雑誌こそは、他のいずれの雑誌よりも多くの啓蒙的な役割が課せられている」とあるように、復刊後も戦中までの編集方針を継承し、新憲法の男女同権と女性解放の啓蒙に努めた。そのため1950年代においても読者層は主に「高学歴、有職」の女性であり、「既婚者の他、新制高校卒の若い世代を強く意識して」の編集だった¹⁴⁾。

一方、1957年の文学状況に目を移すと、当時は女性読者を中心に空前の姦通小説ブームが巻き起っていた。同年に三島由紀夫の『美徳のよろめき』の単行本が爆発的な人気を博したことに端を発する、いわゆる「よろめき」ブームである。このブームに応じて週刊誌には「挽歌」や「美徳のよろめき」「雌花」「渇き」などの売れる根底で、現実の妻たちが、今年は大い

によろめいた。」¹⁵⁾といった言説も躍ったが、注目すべきは、ここに『雌花』も列せられていることである。当時『雌花』が姦通小説として捉えられていたことがわかる。

2. 姦通後小説としての『雌花』

『雌花』は、その始まりから主人公の姦通が常態化している。その意味で、女性の姦通までの道程の心の葛藤や社会的困難を描くそれまでの姦通小説の作法を逸脱し、むしろ女性の「姦通後」を描いた小説と言っていい。それが証拠に第三回では、早速栄子が弁護士に離婚の相談をし始めてしまう。じつはこれこそが、本作の重要な点である。戦後、女性の離婚問題をいち早く取り上げたのが、『婦人公論』だったからだ。

『婦人公論の五十年』を参考にすれば、戦後、新憲法の施行に伴う離婚に関する民法の改正があり、1950年ごろまでに妻から申し立てる離婚の件数が上昇した。この流れを『婦人公論』は、「女性の解放の一つ」として取り上げ、「知名の離婚当事者を登場させ」たり、「離婚の止むなき立ち至った女性のために、法律的知識の裏付けが必要なことを説いていった¹⁶⁾。

その流れの中で掲載されたのが穂積重遠の「離婚読本（下）」だが、この戦後の「夫婦の対等離婚」について詳述した評論において特に目を惹くのは、離婚の第一要因として「姦通」を挙げつつ、「妻がほかの男と関係すればすぐに夫から離婚の訴えを起されるが、夫がほかの女と関係しても、それだけでは妻から離婚を請求し得ない」という、離婚をめぐる旧民法の夫婦不平等が、刑法である姦通罪の不平等に等しく通じるものと捉えている点である。その上で、新憲法の男女平等の理念こそが、この「民法刑法にまたがるいかにも不正不公平な事から」を是正に導いたとされている¹⁷⁾。

このように、戦後民主化政策における離婚の夫婦平等化こそが50年代前半の『婦人公論』において、明治以来の家制度からの女性の解放を表象した。「離婚読本（下）」掲載号で古谷綱武が、「婦人からの離婚請求の最大多数の原因を占めているのは、夫の不貞と虐待」であるから、妻からの離婚の訴えこそが「日本の婦人の、めざめと、進歩だ」と論じたのは最たる例である¹⁸⁾。ただし、こうした認識については読者の間では賛否両論だったようだ¹⁹⁾。

ともあれ『婦人公論』では、1950年から51年にかけて離婚に関する記事を女性解放の文脈で頻出させ、一時はそうした記事が誌面から消えるものの、55年11月号掲載には真野さよの評論が、女性にとっての離婚が「一人前の女になる」方途だと謳うと²⁰⁾、再び離婚が同様の文脈で取り上げられようになる。そうした中、翌年8月号に大岡がエッセイを寄せ、19世紀フランスの「離婚の禁止」や「妻の貞操」へのスタンダードによる非難を、男女の「一種の公平」を保つ恋愛観として紹介する²¹⁾。このことから、以前から大岡が『婦人公論』の文脈を熟知していたと考えていい。

前述の通り、連載の第三回以降、弁護士と栄子の離婚に関するやりとりが始まる。栄子が離婚の訴えを「家庭裁判所へ持って行かうと思ってる」と言うのに対し、弁護士が「家庭裁判所といっても、あなたがお考へになるやうなものぢやありません。社会通念に従って、調

停するんですから、結局日置さんと話し合はなければならない」と教示することに注目したい。この会話は、戦後の離婚制度の改正を明確に踏まえたものにあたる。

明治以来の離婚の手続きである協議離婚と裁判離婚の二段階方式は、戦後の民法改正によって協議離婚・調停離婚・審判離婚・裁判離婚の四段階方式へと変更された。旧民法では、協議離婚とは事実上「夫による妻の追い出し婚」が大半で、裁判離婚も妻にとっては裁判の手続きが難しく、妻による離婚の申し立ては困難を極めた。だが戦後、家庭裁判所で調停委員の仲介を得ての比較的簡便な調停離婚が新たに導入され、妻から訴えを起しやすくなった。栄子の認識を修正する、さきの弁護士「調停」に関する教示は、まさにこの変更に基づいたものに他ならない。

3. 離婚のすすめ

『雌花』では、戦後新たに導入された調停離婚に必要な妻の心構えや法的知識を、弁護士や陽造の口を借りて説明していく。じつは、こうした機能もまた『婦人公論』のそれと合致していた。

たとえば、57年5月号にある川島武宜の法律相談欄では、離婚の夫婦平等を強調したうえで、知らぬ間に夫に離婚届を出された女性の身の上相談への回答として、「離婚の無効を主張することができ」ことや、「その手続は、家庭裁判所に調停を申し出てもよい」ことを教える²²⁾。さらに「グループ便り」欄の投書には、各地の愛読者グループが家裁の調停委員や弁護士などを招き、新民法と離婚の男女平等化について聴講したことも報告されている²³⁾。この点からすれば、『雌花』は連載誌誌面の記事と響き合いながら、いわば離婚のレクチャー小説とでも言うべき性質を帯びていたと見なせる。

ならば、それは最終的にどのような啓蒙性を打ち出していたのか。

第九回、彰は突如何者かに刺殺されてしまう。そのため最終回の第十二回では、「捜査本部に出頭した栄子は、姦通の報告を人に告げるといふ苦しみを持ち、それは彰を失った苦しみより、少いものではなかった」とされる。再婚を願った彰に裏切られ先立たれただけでなく、自らの姦通を警察で告白せねばならなくなった精神的苦痛は、姦通は碌な事にならないと読者に知らせるのに十分なものだろう。ただ他方で、結末部で陽造との協議離婚に成功し、金を手にした栄子には、少年保護施設の建設に向けた自立した主体性が芽生えもする。この結末には離婚＝女性解放という『婦人公論』の文法を透視できよう。

すなわち、姦通後小説であり、離婚レクチャー小説でもある『雌花』とは、『婦人公論』の論調に巧みに呼応しつつ、戦後の既婚女性が夫の束縛から解放される優れた方途として、姦通はやめたほうがいいが離婚は進めて良しという、いわば〈離婚のすすめ〉を啓蒙する小説としてあったと言える。

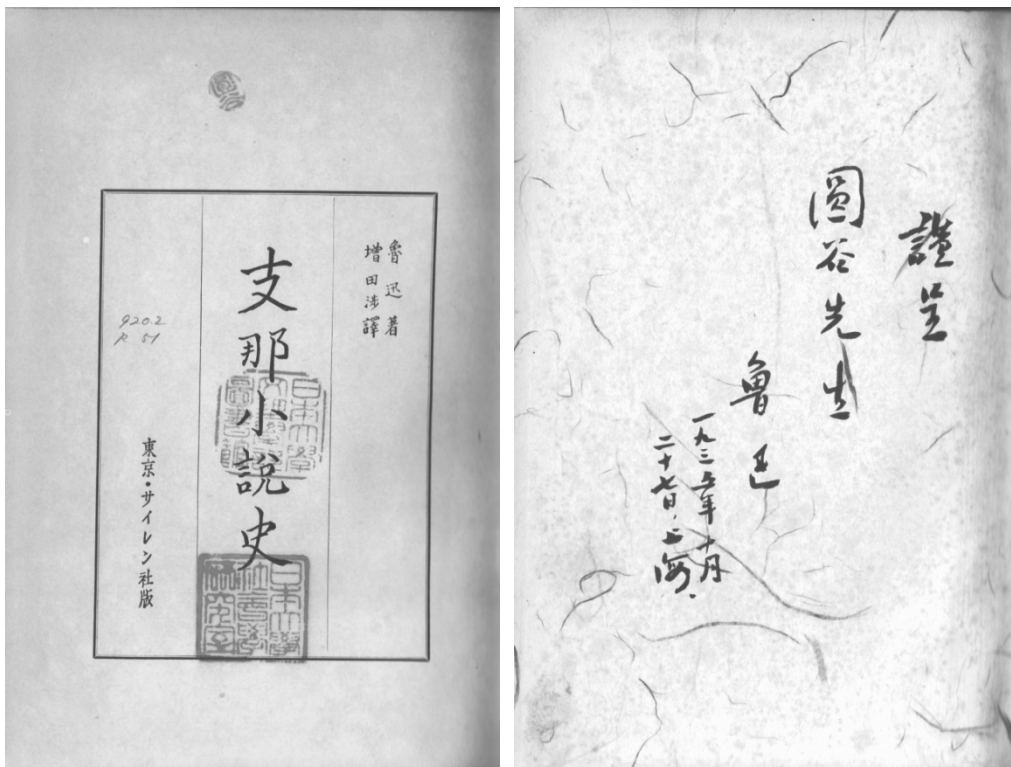
圓谷弘と魯迅——賈植芳先生との出会いから

山口 守

文理学部の図書館に近代中国の文豪魯迅の署名入り本が所蔵されていることは、専門の研究者でも知る人はそう多くない。更にこの本を魯迅から贈呈されたのが、日本大学初代理事長圓谷弘（1888-1949）であることを知る人も学内ではごく少ない。そこでここではこの本の由来と、それが近代中国文学研究においてどのような意味を持つかを紹介したい。

1990年10月、上海復旦大学留学中の私の恩師、賈植芳教授（1916-2008、以下敬称略）を文理学部に招いて、中国文学科や社会学科で講義や講演をお願いした。実は賈植芳は戦前、社会学科に在籍していたので、約半世紀ぶりの母校訪問となった。また賈植芳にとって恩師にあたる馬場明男（日本大学名誉教授）も当時健在だったので、同じく半世紀ぶりの再会を果たすこととなった。

賈植芳は1916年中国山西省に生まれ、北京のミッションスクール崇実中学で学んでいた1935年、日本の侵略に抗議する一二九運動に参加、逮捕されて半年間拘留された。釈放に



魯迅署名入り『支那小説史』
（魯迅著，増田渉訳，サイレン社，1935年，日本大学図書館文理学部分館所蔵）

尽力してくれた伯父の手配で、1936年春、北京から逃れるように日本へ留学に来る。自らが批判、抵抗する帝国日本へいわば亡命のようにやって来るという複雑な事情は、そのまま当時の日中関係の反映でもある。実は賈植芳は北京での最初の入獄体験を含め、一生の間に異なった政府によって三回逮捕、投獄されている。二回目は1945年江蘇省徐州で抗日活動を疑われて日本の傀儡政権に逮捕され、三回目は1955年毛沢東批判によって反共産党分子であるとして投獄された胡風（1902-85）の仲間として逮捕、投獄されている。因みにこの三回目の入獄期間が一番長かった²⁴⁾。

賈植芳の胡風との交流は、日本留学時代に始まっている。賈植芳は東京到着後、覃子豪、郁達夫、郭沫若、張香山、任白戈らと文学者としての交流を持ち、また左連東京支部が催した「ゴーリキー追悼記念会（1936年6月）や、作家蕭紅が司会を務めた「魯迅追悼会」（1936年11月17日）に参加するなど、活発に活動していた。賈植芳の最初の創作小説『人的悲哀』は物語の舞台こそ北京だが、東京滞在中に執筆した作品である。この小説を上海の雑誌『学習與工作叢刊』（上海生活書店）に投稿したことで、編集者の胡風と通信が始まり、生涯にわたる友情と過酷な運命を共有することになった。

1936年春、東京へやって来た賈植芳は、周恩来も学んだ中国人留学生用日本語学校である東亜高等予備校で4月から学んだ後、まもなく日本大学経済学部に入學するが、すぐに法文学部社会学科へ転部する。そもそもなぜ社会学を志したかだが、賈植芳は当時を振り返って、「私はもともと文学創作に一番興味がありました。そこでまず社会学の専門知識を学んで、社会生活を観察、分析、描写する理論的方法を身に付けようと考えました」（『私と社会学』、1990年10月16日、日本大学文理学部社会学科における講演）と述べている。日本大学の社会学科は1920年に私立大学として初めて創設された新領域の学科で²⁵⁾、設立の中心人物が圓谷弘、その助手を務めたのが馬場明男であった。二人とも社会学の視点からの中国研究がある²⁶⁾。当時社会学科主任教授だった圓谷弘は1909年日本大学法学部に入學するが、経済的理由で中途退学、小学校教員を務めた後、京都大学文学部史学科に再入學して、まもなく哲学科へ転科、1919年に卒業後は文部省に嘱託として勤務するが、1920年に文部省在職のまま日本大学社会科教授に就任した。圓谷弘は戦後になって一時期日本大学初代理事長を務めたが、戦前の対中国政策と結びついた諸活動が指弾され、公職を追われた。

在學当時を振り返った文章で賈植芳は、「圓谷先生は週二回講義をし、教材は中国社会の性質や構造に関する自分の著作でした。」（『私と社会学』）と述べている。実際、圓谷弘は時勢に応じるように研究フィールドとして中国を設定、1930年代に何度か訪中している。東洋工業会議なる国策に則った会議出席を目的とした1935年秋の訪中は、帰国後に中国各地での見聞をまとめた『支那社会の測量』によって、その中国観を知ることができる。時期的に見て、賈植芳が「教材は中国社会の性質や構造に関する自分の著作でした」と回想している教材は、おそらくこの本のことだろう。抗日活動に参加したことで帝国日本へ逃れるという奇妙な運命にあった賈植芳が、当時この本をどのように評価したかは今となっては分からない

いが、現時点から見れば、同書は帝国主義的眼差しから免れていない中国社会観察書である。ただし、戦争と知識人の関係を考えるよい材料でもある。とりわけこの中に魯迅へのインタビューが編集、収録されていることに史的価値がある。このインタビュー記録は、正確な逐語記録ではなく、圓谷弘か同行者がまとめたものなので、どこまで客観的に魯迅の言葉を伝えているかは疑問である。ただ圓谷弘によって編集された魯迅の言葉（だと仮定して）の端々に推論の糸口がある。

圓谷弘は魯迅との面会の経緯²⁷⁾をインタビュー紹介の前文で「上海滞在中に某社の支局長から、魯迅に會つてみないかといふ話があつたので、私も在支中に各方面の人の意向も知りたいと思つてゐた際なので、早速北四川路の内山氏の家で會見することにした」²⁸⁾と説明している。『魯迅日記』1935年10月27日にも「円谷弘教授に会う。『集団社会学原理』一冊を贈らる、日本語訳『中国小説史略』一冊を贈る」²⁹⁾との記載があり、面会そのものが事実であること、『支那文学史』がこの時に魯迅から圓谷弘に贈られたものであることが確認できる。現在文理学部の図書館に所蔵されている魯迅署名入り同本は、日本大学社会科学科在職中か退職後に圓谷弘が寄贈したものと思われる。また圓谷弘がこの時魯迅に贈った『集団社会学原理』は前年に出版した自身の著作である。

内山完造宅で行われた魯迅と圓谷弘のこの時の面会で、何がどのように語られたか、魯迅側の資料はないが、『支那社会の測量』収録のインタビュー記録を読むと、魯迅の言葉（だと仮定して）に対する圓谷弘の反応に、その中国社会観がほの見える。

魯迅はまず「支那の共産党は事実に出発する。赤区が拡大し、党员が増加するのは彼等の生活の現実の要求からであつて、本やパンフレットによる理想ではない。それだけに赤区民衆の忍耐力も強く、国民政府に対する反抗も強い。」³⁰⁾と、共産党が進める革命に理解を示



魯迅、圓谷弘、右端の人物は不明（写真は長堀祐造教授提供）

したとされる。更に文学について「国民政府は支那大衆とは完全に対立した存在である。作家が、支那の社会生活の普通のことを書くとする。すると政府にとってはそれが曝露文学であり左翼文学になる。我々によいことは、役人には悪い。新聞にしても、政府に悪いのは国民によい新聞だ。ところが、こういふ新聞はどしどし禁止する。国民党には作家は居ない。何故ならば、国民党に都合のよい作品を作るやうな作家はない。」³¹⁾と現実を描けば自然に社会批判となり、それを国民党が弾圧する実態を厳しく批判したとされる。ただし、その国民党や共産党と戦火を交えて侵略戦争を進める日本に対しても、「日本人も、支那人と同じやうに、自由にものが言へないではないか。」³²⁾と冷静な観察眼を見せる。当然ながら、これはインタビューしている圓谷弘にも向けられた言葉であるはずだが、圓谷弘はそれをどう捉えたか書いていない。

当時中国侵略を進める日本に対しては、「アジア主義といふ言葉で、日本は支那の一致を得やうとしている。しかし、支那を日本の軍隊で維持しやうとする時は、既に支那は日本の奴隷である。日本がアジア主義をかざすのも、日本の一部の人々の考へ方で日本人民の言葉ではないと思ふ。」³³⁾と、厳しい批判を寛容な言い方で示している。これに対する圓谷弘の直接的回答は示されず、「支那は古きも保存せず、新しきものも建設せず、支那の彼岸に見えるものはアラビアの砂漠である。」³⁴⁾と語ったとされる魯迅の一見悲観的な言葉に応じるように、圓谷弘は「熱烈な情熱で、支那青年大衆の第一線に立つた嘗ての革命の戦士魯迅は、追はれる者のあわれな姿で中国を見つめてゐる。しかし彼は自己の信念を捨てないで、あくまで中国政府の圧迫の下で其の日の来るのを望んでゐるのである。」との言葉でこのインタビュー記録を締め括っている。魯迅が中国革命の現状に厳しい目を持ちながらも、決して希望を捨てていない姿に心打たれていることが読み取れるが、その一方中国社会を苦境に陥れている元凶が自らの国家日本であることを、少なくとも文面上は認識していない。また魯迅の日本批判にも答えていない(或いは書いていない)。

この本を教材として圓谷弘の社会学の講義を聞いた賈植芳が、どのように「社会生活を観察、分析、描写する理論的方法を身に着け」たかは別に論じなければならないが、少なくとも一つの結果はあった。賈植芳は1937年7月の盧溝橋事件勃発を機に日本大学における留学生生活を途中でやめて、帰国してまた抗日活動に参加したのである。

注

- 1) 神谷まり子「自動車小説としての『新歌浦潮』——交通事故・殺人事件・運転手のイメージ」日本大学大学院文学研究科中国学専攻『中国語中国文化』(第15号), 2018年3月。なお、本報告ではテキストに海上説夢人『新歌浦潮』湖南文芸出版社, 1998年を使用した。
- 2) 上海汽車工業史編委会編『上海汽車工業史1901-1990』上海人民出版社, 1992年, 11, 12頁。
- 3) 陳伯熙著『上海軼事大観』上海書店, 2000年, 295, 296頁。
- 4) M. フェザーストン, N. スリフト, J. アーリ編著『自動車と移動の社会学——オートモビリ

- ティーズ』法政大学出版, 2010年, 266, 267頁。
- 5) 坂元ひろ子「漫画表象に見る上海モダンガール」, 伊藤るり, 坂元ひろ子, タニ・E・パロウ編『モダンガールと植民地的近代——東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店, 2010年, 126頁。
 - 6) マーシャル・マクルーハン著『機械の花嫁』竹内書店, 1991年, 201～205頁。
 - 7) Virginia Scharff, *Taking the Wheel : Woman and the coming of the motor age*, University of New Mexico Press, 1991, p18.
 - 8) 「幸せの歩き方 上田トシコさんに聞く」(『彷徨月刊』2004年2月)。
 - 9) 日本近代文学館編『文学者の手紙7 佐多稲子』(博文館新社 2006年5月)所収。
 - 10) 「時と人と私のこと (3) 一くぐり抜けと押れあいと」(『佐多稲子全集 第3巻』所収, 講談社 1978年2月)。
 - 11) 「時の人と私のこと (13) 一生きなかつた意図」(『佐多稲子全集 第14巻』所収, 講談社 1979年1月)。
 - 12) 『読書世論調査30年』(毎日新聞社, 1977年)。
 - 13) 古河史江「戦後日本における二つの女性の性—『婦人公論』と『主婦の友』一九四六年～一九五〇年代の分析から」(『総合女性史研究』2007年3月) 24頁。
 - 14) 古河前掲, 23頁。
 - 15) 戸塚文子「〔女性〕よろめきの本家」(『週刊朝日』1957年12月9日号)。
 - 16) 松田ふみ子編『婦人公論の五十年』(中央公論社, 1965年) 187頁。
 - 17) 「離婚読本(下)」(『婦人公論』1950年11月号) 88-89頁。
 - 18) 「夫を捨てる妻たち」(『婦人公論』1950年11月号) 72-73頁。
 - 19) 「愛読者の声—特集『夫婦生活の危機』に寄せて—」(『婦人公論』1950年12月号) 75頁。
 - 20) 「離婚は女の勲章」(『婦人公論』1955年11月号) 130-133頁。
 - 21) 「愛情の結晶作用—スタンダールの『恋愛論』」(『婦人公論』1956年8月号) 55頁。
 - 22) 「女性のための法律相談 (5) 離婚と妻の立場」(『婦人公論』1957年5月号) 178-179頁。
 - 23) 「グループ便り 沖繩支部」(同4月号) 330頁, 「グループ便り 竹の子会(水戸)」(同5月号) 302-303頁, 「グループ便り しるべ会(岐阜)」(同前) 308頁, 「グループ便り 長岡支部」(同6月号) 314頁, 「グループ便り 葵グループ(岡崎)」(同11月号) 326頁。
 - 24) 詳しい経緯は山口守「坐過三種牢獄的知識分子」(『留学生新聞』1991年6月1日)参照。
 - 25) 設立当初は「社会科」と称され, 夜間課程だったが, 1922年新大学令に基づいて正式に「日本大学法文学部社会学科」の認可を受けた。
 - 26) 圓谷弘の主な著作には, 『我国資本家階級の発達と資本主義的精神』(社会学徒社, 1920), 『現代社会政策』(文精社, 1926), 『集団社会学原理』(同文館, 1934), 『支那社会の測量』(有斐閣, 1936)などがあり, 特に『支那社会の測量』は当時の圓谷弘の中国に対する政治的見解が集中的に表れている。馬場明男の主な著作には, 『支那問題文献辞典』(慶應書房, 1940), 『社会学入門』(同文館, 1950), 『社会学新講』(時潮社, 1955), 『社会学概論』(時潮社, 1955), 『社会学小史』(エルガ, 1966)などがあり, 特に『支那問題文献辞典』は文献案内だが, 戦前の馬場明男の中国社会研究の基本的立場を示している。なお圓谷弘の名前の表記と読み方だが, 戦前は「円谷」ではなく「圓谷」を使用しているので, 本文でもそれを踏襲した。また読み方だが, 「つぶらや」ではなく「つむらや」と読むのが本来は正しい。

戦前の著作では奥付に「つむらや」とルビを振って強調しているものが多い。圓谷弘の経歴に関しては、海野力『圓谷弘先生伝』（2006年）及び日本大学ホームページ（<http://www.nihon-u.ac.jp/history/forerunner/tsuburaya/>）に参考情報がある。

- 27) 圓谷弘と魯迅の面会に関しては、長堀祐造（慶應義塾大学）「魯迅と円谷弘——岩村氏宛魯迅署名本をめぐる」(『中国図書』, 内山書店, 1989年9月号), 「円谷教授宛の魯迅署名本見つかる」(『中国図書』, 1990年1月号), 「魯迅と圓谷弘補論」(『中国文学論叢』第15号, 1990年3月)の三篇の詳細な資料研究と解説がある。
- 28) 圓谷弘『支那社会の測量』, 有斐閣, 1936年, 245頁。
- 29) 『魯迅日記Ⅲ』, 学習研究社, 1986年, 144頁。
- 30) 圓谷弘『支那社会の測量』, 248頁。
- 31) 圓谷弘『支那社会の測量』, 248頁。
- 32) 圓谷弘『支那社会の測量』, 250頁。
- 33) 圓谷弘『支那社会の測量』, 250頁。
- 34) 圓谷弘『支那社会の測量』, 250頁。